

「私の願い」

(詩篇27・1〜14)

一、27篇をめぐって

詩篇27篇は、表題に「ダビデによる」とあります。前半の1節から6節までは、作者がダビデである可能性があります。これだけの内容を語られる信仰者は、ダビデこそふさわしいからです。ですが、後半の7節から14節は、ダビデに合わないと思われれます。12節を見ると、作者は法廷で訴えられていたかも知れませんが、王であったダビデが、法廷で訴えられることによって苦しんだとは、考えにくいです。そういうわけで、1〜6節と7〜14節は、二元々は別々の詩篇であった可能性があります。

二、前半(1〜6節)に聞く

1節、2節は、作者が自らの信仰を告白することとなっています。1節です。「主は私の光 私の救い。だれを私は恐れよう。主は私のいのちの砦。だれを私は怖がろう。」とあります。1行目と2行目は並行法で語られていますので、「主は私の光」は、主は「私の救い」と重なり、2行目の「主は私のいのちの砦」とも重なります。

では、詩人が抱いていたこのような確信は、どこから来たのでしょうか。そ

れは、神を信じつつ、様々な試練をくぐり抜け、「主が私を支え、砦となって私を守ってくださり、私を引き上げてくださった」という、神を信じ続けること

によって得られる「年輪」からやってまいります。そういうわけで、27篇の前半の作者がダビデであるとするならば、晩年のダビデと言うことになります。

このゆったりと落ち着いているさまは、どこから来るのでしょうか。主である神との交わりから来ます。それを物語っているのが、4節、5節、6節です。4節を見てみましょう。「一つのことを私は主に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り 主の家に住むことを。主の麗しさに目を注ぎ その宮で思いを巡らすために。」とあります。私は思っているのです。4節を見るたびに、神と詩人を分け隔てている罪がないのです。神とまっすぐにつながっている、ブレが無い、曲がっていない、逆らう心がないのです。そうです。ここに、罪から解放された人の姿を見ます。旧約の時代ですから、まだキリストが登場していません。なのに、罪から解放された人間の姿が、ここにあるのです。もっとも、こんなに美しい思いを抱いていたとしても、所詮、人はすべて罪人です。では、詩人の罪はどこに行ってしまったのでしょうか。時代を超えて、キリストが贖ってくださったと受け止めるのが、私たちイエス・キリストを信じ

る者です。

三、後半(7〜14節)に聞く

7節をご覧ください。「聞いてください 主よ。私が呼ぶこの声を。私をあわれみ 私に答えてください。」とあります。このように呼びかけていますから、何らかの過ちを犯し、罪の自覚があるのであります。詩人は、自らの過ちをうやむやにすることなく、真摯に神の前に差し出しています。こういう人のことを、新約のことばで言うなら「救われている人」となります。詩人は主のことばを思い起こして、語っています。それが8節です。「あなたに代わって私の心は言います。「わたしの顔を慕い求めよ」と。主よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。」と。詩人は、自分が犯してしまった過ちを「ごまかすことなく主の前に祈っています。9節です。「どうか 御顔を私に隠さないでください。あなたのしもべを 怒って 押しけないでください。あなたは私の助けです。見放さないでください。見捨てないでください。私の救いの神よ。」と。

詩人は何らかの罪を犯してしまったことで心を痛め、神の前に祈っています。ここに、私たちが忘れがちなことを教えられます。それは、罪の自覚です。罪とは、神の御思いと地上にいる自分、ないしは自分たちの思うこと為すことが、噛み合っていない状態にあること

です。詩人は神のさばきと恵みの双方を受け止めています。また、10節の「私の父 私の母が私を見捨てるときは主が私を取り上げてくださいます。」より、ひよつとすると、父と母も詩人を見捨ててしまったのかも知れませんが、

詩人は、自分の弱さ、人間の素の姿を弁えています。ゆえに語ったのが11節です。「主よ。あなたの道を私に教えてください。私を待ち伏せている者どもがいますから 私を平らな道に導いてください。」と。敵は強く、小さな過ちも見逃さず、針小棒大に語ります。ゆえに、12節で語っています。「私を敵の意のままにさせないでください。偽りの証人どもが私に向かい立ち 暴言を吐いているのです。」と。そして、13節です。「へしも 私が生ける者の地で主のいつくしみを見ると 信じていなかったなら——。」と語っています。このことばの意味は、「へしも 私が 生ける者の地で主のいつくしみを見ると 信じていなかったなら——。」と語っています。このことばの意味は、「へしも 私が 生ける者の地で主のいつくしみを見ると 信じていなかったなら、今頃はとうなっていたらどうか」と思われます。

最後に、14節です。「待ち望め 主を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め 主を。」とあります。「主を待ち望め」は、「主を恐れることは知恵の初め」と関係していると思われれます。主である神が大きな意味ですべてを支配しておられると知るなら、私共がなすべきことは、祈りつつ、主を待ち望むことです。